

その社会的影響力も減少しつつあるといえるだろう。さらに、「いのち」をめぐる議論における宗教への上記のような期待は、ないものねだりに終わる可能性があるだけではなく、望ましいものでもないと考える。なぜなら、このような状況において宗教の専門家に解答を求めることは、形式的解決で満足することにつながり当事者が自らの世界観と向き合い、問題を引き受ける中で、自ら答えを出す機会を失うことにもなりかねないと考えるからだ。

宗教に求められているのは、「今」という時間限定し、人間社会のみを対象とした既存の支配的な価値観を自明なものとして、当事者に「いのち」についての決断を迫る状況を相対化させることではないだろうか。そして、それぞれの宗教のもつ世界観から人と人、人と自然、現在過去未来のつながりの回復を促していくことが求められているのであり、その時「いのち」とともに最適な応答をしていくことが可能になるのではないだろうか。そして、これは宗教者によってのみ担われることではなく、宗教的世界観を生きる各自の生き様によって練り上げられるものだと考える。具体的には、宗教的天才やその専門家が圧倒的なリアリティをもって新しい生き方を示してくれることを期待するのではなく、私たち自身がそのような世界観を腑に落とす形で創造する契機を育てていく必要があるということだ。では、それはどのようにして可能なのか。

持続可能なコミュニティ形成運動にその一つのヒントがあると考えられる。一九九〇年代近年報告されるようになったエコビレッジやトランジションタウンと呼ばれるこれらの実践において

は、意識的に人と人、人と自然、現在過去未来のつながりの回復が目指されている。またこれは里山の意義など伝統知や実践の再発見、再評価にもつながっている。

ローカルな、顔の見える範囲で、日々の生活の中から、「いのち」のつながりにおいてそれぞれが最適な応答が可能になるような実践例を積み上げていく中に、宗教的なものが確認されるようになるのではないだろうか。

「いのち」が語られる地平

——他なるものとのかわりをめぐって——

竹之内裕文

「いのち」が氾濫している。近年の日本社会では、「生命」、「生」、あるいは「人生」などの類義語ではなく、むしろ「いのち」という語が好んで援用される。そのような傾向は、学術領域においても顕著になりつつある。しかしなぜ「いのち」なのか、立ち止まって考えてみる必要があるだろう。

厳密な定義を与えることは困難であるにしても、「生命」、「生」、「いのち」は、それぞれに固有な意味合いを踏まえて語り出されていると考えられる。たとえば「生命」には、「生命科学」という研究分野に示されるように、「あらゆる生命に通ずる生命一般、動物とか、生物とか、あるいは有機体とつながる」意味合いが認められる（上田閑照『生きるということ 経験と自覚』人文書院、一九九一年）。また「生」には、「生活」や「人生」に通じるような人間的・文化的なニュアンスが色濃く。対して「いのち」は、より包括的な概念として、「生きる」

ことの全体性——それは他なるもの(超越的なもの)とのかかわり(関係、絆、つながり)とともに成り立つ——を指示するといつてよいだろう。

じつさい島蘭進によれば、「いのち」は、個体的、身体的、生物学的な次元での「生命」と区別され、それらを越えた死生の諸次元を表現する時に用いられる語であり、「心」や「魂」や「つながり」(関係、絆)についての文化と切り離して理解することができない(死生学試論(一)、『死生学研究』第一号、二〇〇三年)。また「いのちの教育」の実践者たちによれば、「いのち」は「主体と客体に分析不可能な、すべての事象とながっている」(得丸定子「学校で「いのちの教育」を行う意義」『学校教育研究』一六号、二〇〇一年)、「統合的な存在としての人間」(近藤卓『いのちを学ぶ・いのちを教える』大修館書店、二〇〇二年)にかかわる概念である。

しかし、「いのち」が生きることの全体性を指示するとして、われわれはどのようにこれにアプローチしたらよいのだろうか。学術的な営みが、その都度、限定された対象について論じるものであるかぎり、「いのち」を学問の対象とすることは不可能であると考えられるからである(上田閑照、前掲書)。ここで「いのち」を、自らを隠しつつ、立ち現れる現象と捉えることができないだろうか。かりにそれが可能だとすれば、「生命」や「生」という現れの側面に注目し、そこから「いのち」の在り処に迫るという試みが成立することになる。ただしその場合、「生命」と「生」の概念的な射程を正當に評価する作業が不可欠となる。

たとえば生命体(もの)と生命そのもの(こと)の存在論的差異を踏まえるならば(竹田純郎『生命の哲学』ナカニシヤ出版、二〇〇〇年)、「生命」がもつばら個体的、身体的、生物学的な次元にかかわるという島蘭の指摘は再考を要する。「生」ないし「生活」についても、「我々の最も平凡な日常の生活」(西田幾多郎「歴史的身体」『西田幾多郎全集 第十四巻』岩波書店、一九五一年)の深みや「完全な現在の生活」(宮沢賢治『宮沢賢治全集九』筑摩書房、一九九五年)の驚くべき豊かさが見えに収められるべきであろう。

およそ以上の展望のもと、本研究発表は、人間における「生命」・「生」の営みを、「死」と「環境」とのかかわりから照らし出し、それを足がかりに「いのち」へのアプローチを試みる。人間の「生命」・「生」は、「死すべきもの」という自己認識とともに、「環境」との不可避なかわりにおいて営まれるからである。具体的には、「住み処 Oikos」「環世界 Umwelt」「世界 Welt」との重層的なかわりから、「生命」および「生」の世代間継承を捉えなおしたうえで、「生命と生といのち」の連関とその危機に光を投げかけていく。

パネルの主旨とまとめ

安藤 泰至

「いのち」という語は、生命、生、生活、人生といった語と重なりつつも、それらには回収されない超越的なものとの関係を含んだ生の次元を示す語として、宗教においてもよく用いられてきた。もつとも、これまで諸宗教の伝統において人間と神